

マクロ経済、担保価値、銀行のモラルハザード

東北学院大学 石田裕貴

本論文の目的は、マクロ経済状況の変動に応じて担保価値が変化するとき、担保と銀行のモラルハザードの関係を理論的に明らかにすることである。

モデルの概要は以下の通りである。外生的にマクロ経済が好況か不況かのどちらかに決まり、その状況が企業の投資の成功確率と担保価値に影響を与える。また、銀行のモニタリングと企業の努力も投資の成功確率を引き上げるのに有効である。投資の失敗が明らかになった場合には、銀行は投資を流動化し担保を回収するか債権放棄をして投資を続行させるかの選択を行う。その意思決定は担保価値の大きさに依存する。

マクロ経済が好況のとき、均衡として銀行はモニタリングをせず企業は努力をする。仮定によって、好況のときは担保価値が上昇するので、銀行はその担保の回収によって、投資の失敗に対する損失を埋め合わせることができるので、モニタリングをする誘因がない。一方、担保価値の上昇は、企業にとっては投資の失敗に対する損失が大きくなるので努力することになる。

逆にマクロ経済が不況のときは担保価値が下落し、企業は努力せず銀行もモニタリングをしない。担保価値の下落によって、銀行は投資の失敗に対して流動化ではなく債権放棄を選択する。これを予想する企業は努力をしない。銀行も相対的に投資の期待収益が悪化するのでモニタリングをするインセンティブがなくなる。

したがって、銀行はマクロ経済の状況によらず、担保設定によるモラルハザードを起こすことになる。特に、担保価値が下落するほどのマクロ経済の悪化は、銀行に債権放棄を選択させ、さらに銀行、企業双方のモラルハザードを引き起こすので景気の悪化を強化する方向に働くと言えよう。バブル経済の崩壊による資産価格や地価の下落は、銀行に多くの不良債権をもたらした景気の低迷を長期化させたが、本論文の結果はその一因を説明していると思われる。